

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本看護学会論文集:小児看護(2008.02) 38号:212~214.

保育所通所児の親の応急手当に対する認識と講習会開催のあり方の検討

伊藤良子, 渡邊朋枝, 寺山和幸

保育所通所児の親の応急手当に対する認識と講習会開催のあり方の検討

伊藤良子¹⁾・渡邊朋枝²⁾・寺山和幸²⁾

key word : 応急手当, 育児支援, 保育所, 親

I. はじめに

事故防止や応急手当について社会全体の意識が高まり、子どものCPCR (Cardio-pulmonary Cerebral Resuscitation) の重要性については世界的に認識が広がっている。保育園や幼稚園に子どもを通園させているCPCRを知らない保護者でも、応急手当の学習機会があれば学習したいと思っている人が大変多い。保育園・幼稚園の保護者に対して、保健所・消防署などの講習会や、テレビ、新聞、雑誌、育児書など、さまざまなメディアを通して、できるだけ多くの人CPCRを習得できる機会を提供する試みも行われている。また、宮武¹⁾の研究では、育児不安と応急手当に対する知識から、母親の不安を和らげ、家庭での適切なケア方法を実施したり、夜間救急外来への受診の仕方を指導していく必要性を示唆している。新田²⁾は、ファミリー・サポートセンターでの講習会参加者を対象とした家庭内で発生した事故、育児者の応急処置に関する知識の調査の結果から、タバコの誤飲に対する知識の普及、心肺蘇生法の普及についての工夫が必要であり、育児支援の一環として育児者への知識の普及・啓発に努めることが重要であると述べている。一方、子育て支援として、働く母親のライフスタイルに合わせた講習会のあり方を検討している例は少ない。

そこで今回は、保育所通所児の親を対象にして、応急手当についての認識と講習会などへの受講に対する意識について調査をし、子育て支援としての応急手当の講習会開催のあり方について検討したので報告する。

II. 研究目的

保育所通所児の親の応急手当についての認識と講習会などの受講に対する意識について調査をし、子育て支援としての応急手当の講習会開催のあり方について検討することを目的とした。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

宮武¹⁾の研究を参考にして独自に作成した質問紙を用い

た調査研究である。

2. 対象

A市内の保育所に子どもを通所させている227家族で調査に協力の得られた78家族(回収率34.4%)である。

3. 調査期間

2006年5月に行った。

4. 調査内容

①応急手当についての講習会などの受講希望の有無、②開催日時の希望、③子育て支援利用の有無、④電話相談の有無、⑤休日・夜間の受診の有無、⑥応急手当の認識などである。

⑥については、「痙攣」「広範囲のやけど」「呼吸停止」「心停止」「意識消失」「大出血」「熱中症」「溺水」「窒息」「危険物誤飲」の10項目とした。対象者が意味を捉えやすいように、質問紙では以下の表現とした。「けいれんをした」「かなりの範囲のやけど」「呼吸が止まった」「脈が止まった」「意識がない」「出血が激しい」「熱中症にかかった」「水におぼれた」「のどに何かつまった」「危険なものを食べた」という表現を用いた。

応急手当の知識に関する質問の選択肢は、宮武¹⁾の研究で使用したのと同じ表現を用い、「知っている・だいたいできる」「少し知っているが自信がない」「全く知らない・できない」の3段階での回答とした。なお、今回の調査は、調査対象者の応急手当に対する認識の現状を把握するために行うものであり、応急手当の定義などは質問紙に記載していない。

5. 配布回収方法

A市内保育所職員より通所児の家族に配布していただき、回答後は郵送にて回収した。

6. 分析方法

統計処理は、統計解析ソフトSPSS13.0Jを使用して記述統計により単純集計を行った。

7. 倫理的配慮

調査協力依頼文に、本調査は無記名で行い、統計的に内容を分析するため個人が特定されることはないこと、データ管理についてデータ流出を防ぐためにハードディスクに保管せず、DVDなどに入れて鍵のかかったロッカーに保管すること、郵送していただくことにより研究への同意が得られたものとするを記載した。

1) 市立名寄短期大学看護学科 2) 名寄市立大学保健福祉学部看護学科

IV. 結 果

1. 対象者の属性について

1) 母親の年齢

20代前半2名(2.6%), 20代後半20名(25.6%), 30代前半32名(41.0%), 30代後半21名(26.9%), 40代前半3名(3.8%)であった。

2) 子どもの年齢

乳児期7名(9.0%), 幼児前期35名(44.9%), 幼児後期36名(46.2%)であった。

2. 電話相談の有無

電話相談をしたことがある人は7名(9.0%), ない人は71名(91.0%)であった。

3. 休日・夜間の受診の有無

休日・夜間の救急外来を受診したことがある人は64名(86.5%), ない人は10名(13.5%), 未記入が4名であった。

4. 応急手当の認識状況について(表1)

応急手当についての回答は、「全く知らない・できない」と「少し知っているが自信がない」を合わせると、「痙攣」78.9%、「広範囲のやけど」88.1%、「呼吸停止」89.4%、「心停止」92.1%、「意識消失」93.4%、「大出血」88.1%、「熱中症」81.3%、「溺水」89.4%、「窒息」79.0%、「危険物誤飲」88.2%であった。

5. 講習会受講希望の有無(図1)

受講希望あり61名(80.3%), 受講希望なし15名(19.7%), 未記入2名であった。

6. 講習会開催の希望日時

1) 希望曜日(図2)

土日33名(64.7%), 平日18名(35.3%), 未記入27名であった。

2) 希望時間(図3)

土日日中35名(60.4%), 平日18時以降14名(24.6%), 平日日中5名(8.8%), 未記入21名であった。

自由記載欄での意見では、「仕事が不定期だから受講が難しい」「講習会には、是非託児をつけて欲しい」「時間の作れない人も多くいるので、パンフレットなどあれば自分で勉強したい」があった。

7. 子育て支援利用状況(図4)

支援利用あり13名(17.8%), 支援利用なし

表1 応急手当の認識状況

	全く知らない・できない	少し知っているが自信がない	知っている・だいたいできる	未記入
痙攣	20名(26.3%)	40名(52.6%)	16名(21.1%)	2名
広範囲のやけど	14名(18.4%)	53名(69.7%)	9名(11.8%)	2名
呼吸停止	28名(36.8%)	40名(52.6%)	8名(10.5%)	2名
心停止	38名(50%)	32名(42.1%)	6名(7.9%)	2名
意識消失	37名(48.7%)	34名(44.7%)	5名(6.6%)	2名
大出血	15名(19.7%)	52名(68.4%)	9名(11.8%)	2名
熱中症	25名(33.3%)	36名(48%)	14名(18.7%)	3名
溺水	26名(34.7%)	41名(54.7%)	8名(10.7%)	3名
窒息	11名(14.5%)	49名(64.5%)	16名(21.1%)	2名
危険物誤飲	18名(23.7%)	49名(64.5%)	9名(11.8%)	2名

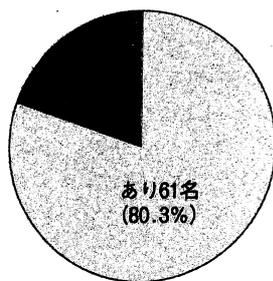


図1 講習会受講希望の有無

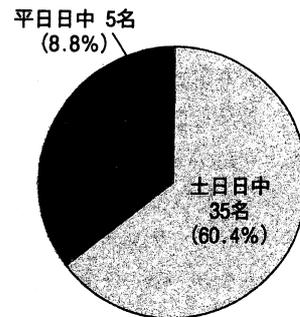


図3 講習会開催希望時間

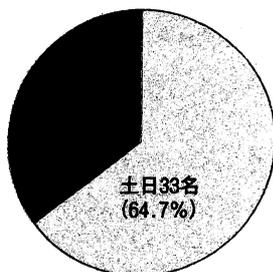


図2 講習会開催希望曜日

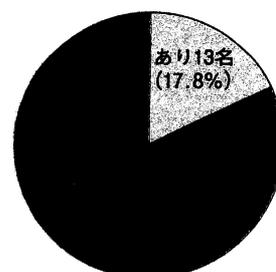


図4 子育て支援利用状況

60名 (82.2%)、未記入5名であった。

8割以上が子育て支援を利用していなかった。子育て支援を利用しない理由としては、「時間がない」「暇がない」「時間帯が合わない」「保育所に行っているから」「もうすでに団体の友達同士の輪ができていて入りづらい」などの回答があった。

V. 考 察

地域によっては、応急手当について電話相談で積極的に対応している所もある³⁾。しかし、今回の調査では、電話相談したことがある人はわずか9%であり、休日・夜間に受診した経験のある人は86.5%であった。

今回質問紙にあげた応急手当のすべての項目について、およそ8~9割の親は応急手当に自信がなく・できないと回答していた。また、8割の親が講習会を受講希望していることから、応急手当に対する講習会などによる子育て支援の必要性があると考えられる。

前田は、「地域で活動する子育てサークルにおいての『子どものホームケア』と題する応急手当の講習会では参加者の満足度が高く、落ち着いて学ぶことに役立っていた。講習会と個別の対応を併用することで理解が深められる⁴⁾」と報告している。

花森は、応急手当の普及啓発としてペーパーベビーレサシアンを考案し、これを応急手当の講習会などで用いたときの利点として、「①ペーパーベビーレサシアンは、経費がかからず、短時間で簡単に作成できる。②作成することで体のしくみや応急手当の必要性、圧迫位置や手順が覚えられる。③大勢の受講者がいても、限られた時間内に全員が乳幼児の心肺蘇生法を体験できる。④乳幼児の心肺蘇生用訓練人形とよく似た効果が体験できる。⑤大勢の受講者がいる講習会でも、自分だけの人形を使用するために恥ずかしがることなく、積極的に体験できる。⑥家庭で楽しみながら作成でき、一度作ればいつでも作れ、いつでも体験することができる⁵⁾」と述べている。子どもの応急処置に関する講習会を実施しようとする場合、ペーパーベビーレサシアンを導入することによって講習時間を短縮するなど、働く母親が参加しやすい形態を

実現することができるものと考えられる。

講習会の開催日時は、希望日時から土日の日中や平日の夕方など講習会を開催することも考慮すべきであると思われる。

また、子育て支援利用状況と利用していない理由も合わせ考えると、通所している保育所と連携して託児所や育児相談コーナーを設けるなど、働く母親のライフスタイルを考慮してあげることや、短時間で受講し、家庭でも練習できるようにペーパーベビーレサシアンを使用した受講しやすい環境を整えた支援のあり方についても考えていかなければならないと思われた。

VI. 結 論

- (1) 保育所通所児の親の多くは応急手当に対する自信がなく・できないため、講習会の受講を希望している。
- (2) 働く母親のライフスタイルに合わせた子育て支援として、土日の日中や平日の夕方などに講習会を開催することも考慮すべきである。
- (3) 家庭でも練習できるようにペーパーベビーレサシアンを使用するなどにより、短時間の講習会となるよう工夫する必要がある。
- (4) 保育所と連携して託児所や育児相談コーナーを設けるなど、働く母親のライフスタイルを考慮した講習会の開催についても検討すべきである。

引用文献

- 1) 宮武典子・中江秀美・渡邊照代、他：小児の休日・夜間救急外来を受診した母親の育児不安と受動行動，第33回日本看護学会論文集（小児看護），p.79-81，2003.
- 2) 新田雅彦・清水俊男・玉井浩：育児者の応急処置に関する知識についての調査，日本小児救急医学会雑誌，1(1)，p.102，2002.
- 3) 長村敏生：電話相談，小児看護，26(9)，p.1295-1298，2003.
- 4) 前田留美：看護師が行う育児支援—子育てサークルを対象とした「子どもホームケア」講習会の実施—，川崎市立看護短期大学紀要，11(1)，p.29-35，2006.
- 5) 花森幸久：ペーパーベビーレサシアンを活用した応急手当の普及啓発について，プレホスピタル・ケア，14(3)，p.54-59，2001.